

抜歯を再生医療に

古典落語の中には、サゲ(落ち)が現代では通用しにくく、わかりにくいものが多々あります。

「佃祭り」という落語もそうで、身投げをしようと



橋にたたずむ女を助けた男が、後年、その女から命を助けられるという運命の出会いをしました。この話を耳にした与太郎さんが、じゃあ俺も身投げをしようとする人を助けよう、そうす

れば後でいいことがあるはずと弁当ぶらさげ江戸の町をいきあたりばったりで歩き出します。すると、ちょうどそこに、橋の上で思い

つめた様子でたたずむ女が、飛びついて助けたつもりが、なにをするの!と怒られてしまいます。だって、

たもとは身投げ用の石ころがたたくさんあるじゃないか、と叫んだところ、「これは歯痛をしずめるために納める梨でございます」という女のセリフで落語が終わりです。

この落ちには説明が必要でしょう。当時、戸隠様に梨断ちをして願をかけるという風習があったと

歯痛がおさまるといいうなら

わしがあつたからなのです。えっ!? 戸隠さまがわからない? 願をかける、がわからない?

それはもうおいといて、昭和の時代には、子供のこ

ろ、歯が抜けると、下の歯は上へ、上の歯は下へ放り投げるという、という言い伝えがあり、私も抜けた歯を屋根の上に放り投げた体験があります。きつと、抜けた歯がなんとなくもった

いがない気がして何かに役立つようにとそんな願かけ伝説ができあがったのでは。

ところが、現代では、言い伝えどころか、抜けた歯から幹細胞(歯髄細胞)を取り出し、細胞バンクに保存しておくとのちになんらかの障害を受けたときに、心臓や血管や皮膚や角膜などの再生医療に役立たせる研究が進んでいるそうです。以前このコラムで、出産

時の「へその緒」から採取した臍帯血をバンクに預けておくと、のちのち役立つことをご紹介しましたが、出産時という限定された状況で保存を判断できるのは祖父母、両親と限られた家族になります。歯髄細胞なら、子供から大人まで、乳歯の生え変わり、親知らずを抜いたときなど、自分で保存も可能になります。

歯のがんはないことからもわかるとおり、歯髄細胞はとても良質で丈夫な細胞、第一、自分の細胞なので拒絶反応が減少します。

いま話題のIPS細胞が自分の歯からできるという朗報。未来の再生修復医療のために準備できる抜けた歯の立派な役目。詳しいことをお知りになりたい方はぜひ医療機関やインターネット

で調べてみてください。

世間のあなから